

シベリア抑留記

北海道 宮崎 維新

随想

この世に生を受けて、「あつ」という間に八十歳の誕生日を迎えた。いよいよ残り少ない余生を悔いのないものと念ずる。今静かに過ぎ去った八十年間を振り返ってみる時、人生の不思議な運命に驚かされる。寿命は生まれた時から定めあるというが、父は七十九歳、母は六十六歳でこの世に別れを告げた。いつの間にか父母の年齢を超えてしまった。一年は三百六十五日というが、そのうち半分は寝て暮らすので、本当の意味は二百日に満たないことを考えると短いのも当然かも知れない。

昔、ある人が「神様は、なぜ一年をもつと長いものしてくれなかったんだろう」と話したら、「それだったら、人間の平均寿命は半分になつて

しまうだろう」と言われて苦笑してしまった人の話があった。

今日までの人生で生涯心から離れないものがある。昭和十(一九三五年)十二月、十歳の時、今は異国の地となった樺太に移住し、寒さに耐え、一年のうちおよそ半分はランプの生活であった。そしてこの間、登校下校には渡し舟でなければならなかった。

間もなく十五歳を迎える四月、この地から親戚を頼って単身上京し、五年近く親の仕送りを受けず、不安の中で苦しい生活であったが、いつの間にか楽しくなった。

昭和二十年三月、働きながら五年制の商業学校を卒業した。この頃は太平洋戦争が終わりに近く、勝てぬ戦いとも知らず、日本最後の現役兵として樺太部隊に召集され、わずか五十日で終戦となり、およそ二年間のシベリア抑留生活が待っていた。

シベリア地方、アムール川の河口に位置するニコライエフスクという地方都市であった。零下四

シベリア抑留記

〇度の極寒での屋外作業、重いノルマを課せられた森林の伐採作業に従事し、多くの仲間が飢えと寒さに耐えながら、同僚が次々と倒れていく苦闘の中で、生きる力と苦しみを体験した。

昭和二十二年夏、舞鶴に上陸、故国の地を踏んだときの感涙は昨日のように蘇ってくる。

父は宮崎家の三男に生まれた。三代半ばに樺太移住の決意を固め、昭和の初め頃から出稼ぎにより移住先を決めていた。

昭和十年秋、故郷函館市根崎町を後にした。それから十年、父は八人の子供を育て、馬車馬のように働いた。しかし真夏の熱い太陽よりも、暗い夜道を静かに照らす月の光に憧れることがある。

一家の中でも家政全般を知らぬ子供には、苦勞して稼ぐ父よりも、直接慈愛を注ぐ母にすぎるものである。東京での苦学、シベリアの労苦、布団に入ると母の顔が臉に浮かび、涙した日々が郷愁とともに思い出される。

一、昭和二十年六月末近く、沖縄戦の死闘続く中、我ら皇国の兵として、樺太大泊に集められ、戦争開始から早三年余、朝に夕に勝利を信じつつ空腹と訓練の辛さを耐え忍ぶ。

二、我が中隊はアメリカ侵攻軍を防ぐため、アツツ、キスカの悲報を胸に秘め、古兵しごきの下、にわか仕込みの師団通信兵。

三、戦況悪化、本土に敵機来襲す。本土決戦叫ぶ中、八月に至り原子爆弾投下され、神風ついに表れず。

四、八月九日、ソ連突如日本に宣戦し、これに応戦せし満樺太軍、敵戦車の下に死に行けり。

五、この情報我ら聴く、戦い終わる十五日、玉音悲しく報ぜらる。忍び難きを忍べよと、戦い終わり日が暮れて、白旗立てる情けなや。

六、一列縦隊、武器返納。樺太島に秋が来て愛憎

涙の雨が降る。恨みは深しソ連軍、かつて我らが中隊大泊で、武装解除は豊原で、将兵ついに

別れたり。

七、十月の終わり秋早く、どこへ行くのや船の中。

港離れてややしばし、ああ無念。進路は北に向かつており、礼文、利尻の影見えず。

八、暗き船底二日二夜、エンジン止まり岸に着く、次々上がる異国の地。岸壁高く、スターリンほか、ソ連高官画像あり。

九、ソ連将校、岸を歩みて我らを見る。歩む我らの両側に銃剣監視兵付きまとい。沿道の人々珍しげにしばし見る。

十、地上は既に雪ありて、入るはニコライ收容所、有刺鉄線張りし中、二段ベッドに古毛布、着の身着たまま寝る夜は、体は冷えて寝もやらず。

十一、ペチカは冷えて暖気なし。三〇〇グラムの黒パンに、味つけ悲し塩スープ。粟、豆、麩（フスマ）、コウリヤンも飯のうち。

十二、昭和二十一年の年も明け、スコラダモイとおだてられ、飢えと寒さの酷作業。今日も昨日も生地獄、無情一入感ぜらる。

りたい渡り鳥。

二十一、父上母上、妻や子は、便りせぬ身を、語り合うてか案じてか、心に祈る星空を、ああ懐かしの北斗星。

二十二、南を指し幾百里、アムール川を遡る、シベリア鉄道鈍い旅、捕虜の鎖は解き放されて、感極まっていた涙。

二十三、よくもここまで生き抜いた、命も春に還り咲き、帰国列車が気にかかる、いざ乗船に足早く、残されまいと気が騒ぐ。

二十四、懐かしの白衣の乙女赤十字、ああ本当に帰れたとただ涙、航跡を眺め感無量。

虜囚、流涙、帰国の希望も失われた二年近く、未だかつて味わったことのない貴い体験をつんで、昭和二十二年七月、待望の故郷へ向けて、波穏やかな日本海帰還船遠州丸にて、憧れの故国、舞鶴港へ。

十三、作業終え、疲れて帰る重い足、ラーゲルの薪焚く煙しらじらと、夕陽さえぎるシベリアの冬。

十四、憩いの我ら收容所、裸電球暗い部屋、隣は民間囚人刑務所、望楼の兵士の銃口見え、近く者は殺される。

十五、朝まだ暗き酷寒に、作業整列命ぜられ、今日も明日も生地獄、アムール川の丸太揚げ。十六、風に吹かれて西から東、雲よ流れてどこへ行く、祖国の上を通るだろう、雲は応えず涙雨。

十七、語らう友の声も絶え、明日の命の定めなく、遠い見知らぬシベリアで、東の空に合掌す。

十八、待てど暮らせど船は来ず、集るしらみにさいなまれ、ただ食いたいだけの朝昼晩。

十九、異国の涯に、屍を埋めし友よ、雪のシベリア身も凍る、友よ眠れよ安らかに、帰国できたら遺族に語りたい。

二十、帰りを待ちわびる故郷の、父母妻子の姿が目に見えぬ、雁よ鳴き鳴きどこへ行く、俺もな

シベリア抑留の思い出

福島県 橋本 宗明

私はシベリアに三年ぐらいいたけれども、そのこともあまり多く語ったことはないと感じております。高等学校で二十年間生徒の前でいろいろ話をしてきましたけれども、その間にもあまり多くを触れたことはなかった、こういうふうに思います。したがって、私がまとめて体験をご紹介しますのは全くの初めてでございます。

いろんな意味で、私の人生、物の考え方に多くのことを残してくれたのは、間違いなく抑留体験でございます。まともにそのことに触れることには、ある意味で心の中で恐れを感じていたということもあるうかと思えます。

一応私の経歴をやや詳しく申し上げますが、私は現役兵として一番最後の初年兵でございます。大正十四（一九二五）年生まれ。十五年生